

# Tautology の考察

## — ad hoc 概念の視点から

西川 眞由美

### 1. はじめに

tautology とは、命題論理学 (propositional logic) で、論理式の要素がいかなる値をとっても、全体が真である論理式であるとされている (荒木他 1992: 1469-1470)。そのような論理式の中でも特に談話によく使用されるものとして、次のようなものがあげられる。

(1) *War is war.* ( $\forall x (Wx) \rightarrow (Wx)$ )

(2) *Either John will come or he won't.* ( $p \vee \sim p$ )

(3) *If he does it, he does it.* ( $p \rightarrow p$ )

(Levinson 1983: 111)

(1) は、「戦争は戦争だ。」、(2) は「John は来るか来ないかだ。」、(3) は「やるのなら、やるよ。」となり、いずれも、自明で、明らかな真実を述べているにすぎない。しかし、このように、tautology は一見意味的に空虚に思われるが、談話の中では大いに意味を伝達していることがわかる。例えば、次例を見てみる (Levinson 1983; Wierzbicka 1987; Fraser 1988; Ward and Hirschberg 1991 等参照)。

(4) The US must take substantive military action against all known terrorist bases as well as governments that sponsor terrorism. *War is war.* *Haboring terrorists is a criminal act of war.*

(5) A : I'm wondering if John will really come to the meeting or not.

B : *Either John will come or he won't.*

(6) A : Does John want to study art in France?

B : Well, he doesn't seem to be interested in that now. But *if he does it, he does it.*

(4) では、「テロリストをかくまうということは、(実際は直接の軍事行動を行ってはいない

けれども) 間接的な意味ではれっきとした戦争とみなされる。」という論理でアメリカのイラク攻撃を容認する発言の中で、「戦争というものは、どんな形を取るにせよ戦争だ」という意味で *tautology* が使用されている。(5) では、「John は本当に会議に来るのかなあ。」という A に対して、B が「John は来る時はきちんと来るけど、来ない時は連絡すらしないですっばかす。」というような意味でその *tautology* を使用している。(6) では、「John はフランスで芸術を勉強したいと思っているの。」と尋ねる A に対して、B が「(そうね、このごろあんまり興味ないみたいね。) でも彼の場合、やるのなら、やるわよ。」というような意味でその *tautology* 発話を使用している。このように、字義通りの解釈ではなんの意味もなさない *tautology* が、実際の談話の中では非常に自然に用いられ、かつ、聞き手はその *tautology* 発話によって発話者が意図することをそれほどの困難無く理解していると考えられる。

本稿では、*A is A*. という形式を持つ名詞句 *tautology* (以下 *tautology* と称す) に焦点を絞り、認知語用論の立場から、談話における *tautology* 発話の解釈に関し、下記の三つの問いをたて、関連性理論 (Sperber and Wilson 1995) の *ad hoc* 概念を使用することにより、これらの問いに対して適切な説明を与えられることを示す。

- (a) 聞き手はどのように *tautology* を解釈するのか?
- (b) 話し手は *tautology* を使用することによってなにを伝達しているのか?
- (c) 話し手は *tautology* を使用することによってどのような効果をねらっているのか?

## 2. 先行研究

### 2.1 Grice と Levinson の語用論的アプローチ

Grice (1989: 33) は、特定の文脈において伝達される *tautology* 発話の意味は量の格率違反 (the violation of the maxim of Quantity) と協調の原理 (the Principle of Cooperation) からでてくる含意、つまり特定会話含意 (particularized conversational implicature) の特別な例としている。Grice の *tautology* の分析を受け継いだ Levinson (1983) は、最初に見た (1) ~ (3) の *tautology* 発話は (7 a) ~ (7 c) のような含意を伝達していると述べている。

- (7) a. 'terrible things always happen in war, that's its nature and it's no good lamenting that particular disaster'
  - b. 'calm down, there's no point in worrying about whether he's going to come because there's nothing we can do about it'
  - c. 'it's no concern of ours'
- (Levinson 1983: 110-111)

つまり、(1) は「恐ろしいことは戦争にはつきものだ、それが戦争の本質なのだから特定の被害を嘆いても仕方がない」、(2) は、「落ち着いて、彼が来るかどうか考えたところで意味はない、だって我々にはどうしようもないのだから。」、また、(3) は、「我々の知ったことではない」というような含意を伝達しているとしている。

しかしながら、Grice 派の分析にはいくつかの問題点がある。第一の問題点は、ある文脈である tautology が使用されたとき、聞き手はどのようなメカニズムで特定の含意を導出するのかを示していないということである。例えば、特定の文脈や特定の個人が所有する知識などがどのように解釈に影響するのかに関して、彼らは何も述べていない。したがって、(1) ~ (3) の tautology が異なる文脈で発話されたとき、常にそれぞれ (7 a) ~ (7 c) と同じような含意を伝達するのかということに関しても何も説明していない。第二の問題点は、量の格率違反と協調の原理から導出される含意は他にもあり、その中で tautology は特別な例としているが、どのように特別なのかを示していない<sup>1)</sup>。確かに、ある文脈で、Levinson が示した (7 a) ~ (7 c) のような意味が (1) ~ (3) の tautology によって伝達されることは可能だろうが、それらを伝達するために何故話し手が *A is A* という形式を使用するのかを明らかにしなければ、tautology の解釈を説明したことにはならないのである。

## 2.2 Wierzbicka の意味論的考察

Wierzbicka (1987) は、tautology の解釈は言語によって異なり、英語においては (ART) *N<sup>i</sup> be (ART) N<sup>i</sup>* という一般式で表される統語構造に依存し、その主な意味を NSM (Natural Semantic Metalanguage) によって以下のように定義している<sup>2)</sup>。

(8) a. *Nabstr is Nabstr.* : 'sober attitude towards complex human activities'

War is war. Business is business.

b. *Nhum.pl is Nhum.pl.* : 'tolerance for human nature'

Boys are boys. Women are women. Kids are kids.

c. (ART) *N is (ART) N.* : 'obligation'

A rule is a rule. A promise is a promise. A father is a father.

(Wierzbicka 1987: 104-110)

確かに、(8 a) ~ (8 c) の形式がそれぞれに示されているような意味を伝達することは可能だろうが、Wierzbicka の分析にはいくつかの問題点が考えられる。第一に、ある形式の tautology が文脈によってさまざまな意味を伝達するという事実を説明できない (Fraser 1988:216, Ward & Hirschberg 1991:509)。たとえば、(8 a) の形式を持つ *War is war.* という tautology は、(9) (10) の二つの異なる文脈の中で伝達される意味はかなり異なる。

- (9) A : The US is going to attack Iraq, you know.  
B : Yeah, it's reasonable in many ways, isn't it?  
A : But *war is war*.
- (10) (The president of the arms-manufacturing company is pleased when he hears the news that a war will start.)  
Employee : But I'm afraid this war will not last long.  
President : *War is war*.

(9) で使用される *war is war* は、「(アメリカのイラク攻撃はある意味で理解できるけれど) 多くの罪のない人を巻き添えにするという意味では賛成しかねる」というように解釈され、「人間の複雑な行動に対するさめた態度」を伝達しているという Wierzbicka の定義は正しいように思われる。しかしながら、(10) では、同じ *war is war* という tautology は、「複雑な人間の行動に対する真摯な態度」ではなく、「どんな戦争でも武器製造会社にとっては利益になる話だ。たとえこの戦争が長く続かなくても、儲け話にはちがいない」ということを伝達していると考えられ、Wierzbicka の (8 a) の定義には当てはまらない。同じことが (8 b) の形式を持つ *Kids are kids* や (8 c) の形式を持つ *A father is a father*. いう tautology に関しても言える。(11) ~ (14) を考えてみる。

- (11) A : Ben broke his glass again!  
B : *Kids are kids*.
- (12) At Living Wisdom School, my son has learned to appreciate that people has different needs and different abilities but *kids are kids*, and it's possible to have fun without always having to win.
- (13) (Bob says to Tom, who is always complaining about his naughty kids.)  
A teacher can quit or be fired. But a *father is a father*, whether you like it or not.
- (14) A : What did you do yesterday?  
B : I went to the movie with my father.  
A : Did you have a good time? He seems like a nice man.  
B : *A father is a father*.

(11) では、*Kids are kids*. は Wierzbicka の定義通り「子供はどうしようもないものだ」という意味を伝達するのに使用されている。しかしながら、(12) で、*kids are kids*. によって話し手が伝えたいことは、「子供はどうしようもないものだ」という否定的な面ではなく、「(勝敗を考えず楽しめる純粋さを持っているという意味で) 子供は本質的に皆同じだ」などの肯

定的な面を強調するために使用されており、Wierzbicka の (8 b) の定義には当てはまらない。(13) では、*A father is a father.* は「先生 (という仕事) と違って父親は途中でやめることは出来ない」という意味で、(8 c) の定義通り「父親としての義務」を伝達していると考えられる。しかしながら、(14) の例では、父親としての義務というより、「父親はみんな本質的に同じ (娘には甘いけど、何となく物足りない)」というようなことを伝達していると考えられ、(8 c) の定義には当てはまらない。このように、同じ形式を持つ tautology 発話でも、使用される文脈によってかなり異なる意味を伝達するという事実は、tautology の解釈には、文脈情報を取り入れた語用論が必要であることを示唆している。

さらに、Wierzbicka の分析では、tautology を使用することによって、NSM で定義された意味以外にさまざまな推意が伝達されるという事実を説明できない<sup>3)</sup>。たとえば、(14) の tautology から、話し手はさらに以下のような推意を伝達するかもしれない。

(14') a. I like to go to the movie with my boy friend.

(14') b. Being with a father is boring.

このような推意の導出に関しても、Wierzbicka が主張する形式に伴う意味だけでは説明出来ない。やはり、tautology の解釈には、形式に基づく意味論だけではなく、もっと文脈に依存した語用論的説明が必要になると結論づけられる。

### 2.3 Ward & Hirschberg の GCI 分析

Ward and Hirschberg (1991) は、*A is A.* という tautology は、発話者によって意図的に避けられた *A is B.* という発話を文脈から想定し、「*A is B.* は関連がない」という一般会話含意 (generalized conversational implicature、以後 GCI と称す) を伝達するとしている<sup>4)</sup>。Grice 派の語用論的分析を受け継ぎ、文脈の役割をその解釈に織り込んだという点で評価できるものである (辻本 1996 参照)。下記の例を見てみる。

(15) The defense claimed White had asked him to kill her. The prosecution countered with the claim '*Murder is murder*'.  
(Ward and Hirschberg 1991: 512)

(15') '*Murder is sometimes justifiable*' (*A is B*) is not relevant.

(15) の tautology を解釈する場合、聞き手は (15') のような「殺人は正当化される場合もある」という想定を当該文脈から呼び出し、それは関連が無いという含意が伝達されているのだと理解するとしている。確かに、*A is A.* という形式から文脈に応じて *A is B.* という想定を呼び出すという彼らの考察は、なぜ同じ tautology が文脈によって異なる意味を伝達するの

かを説明出来る。しかしながら、次のような問題点があると考えられる。第一に、*A is A* からどのようなメカニズムで *A is B* を呼び出すのかを示していない。第二に、*tautology* を使用することによって、GCI 以外に前節で示した (14) のようなさまざまな推意が伝達されるという事実を説明できない。第三に、*tautology* を使用することによる効果を説明していない。辻本 (1996) でも議論されているように、Ward & Hirschberg の分析における「*A is B* は関連がない」という含意だけでは、*tautology* の持つ語調の強さ、議論をうち切るような激しさ、さらに5節で述べるさまざまな効果を説明することは出来ないのである。

#### 2.4 辻本の分析

辻本 (1996) によると、*A is A* という形式を持つ名詞句 *tautology* は、二人以上の人間の間に、ある事柄に関して意見の不一致が見られる状況で使用され、文脈に潜在する否定によって一旦うち消された事柄を再度強く主張するための表現形式であるとしている<sup>5)</sup>。(15) の例で考えると、「誰かが犯した殺人 (X) は私利私欲のために邪魔になる人物を殺す殺人 (A) とは違う」、つまり *X is not A* という否定が文脈に存在することを認識した検察が、「その人が犯した殺人 (X) は私利私欲のために邪魔になる人物を殺す殺人 (A) である」、つまり *X is A* だと主張している、としている。*tautology* がその直前に *but* という接続詞を伴うことが多いという事実は、「あなたは *X is not A* だと思っているようだが、*X is A* なのだ」とする辻本の分析は、納得できるものである。さらに、文脈特定の事物 X と述部 A が明らかする辻本の分析は、*tautology* の個々の事例をうまく説明出来ると考えられる。しかしながら、次のような問題点が考えられる。まず、聞き手はある文脈に潜在する否定命題 *X is not A* をどのように導出するのかを示していない。第二に、*tautology* は (10) や (14) が示すように、二人以上の人間の間に必ずしも意見の不一致が見られない状況でも使用されるという事実が説明できない。たとえば、(10) で、武器製造会社の社員は「今度の戦争は短いので儲けが薄いのではないかと心配しているだけで、「儲からない (*X is not A*.)」と考えているわけではない。また、(14) で、A は「B の父親は結構話が分かるいい父親だ (*X is not A*.)」と必ずしも思っているとは限らない。ゆえに、いったん否定された *X is A* を再度強く主張するというより、(10) では「どんな戦争でも儲かる」、(14) では「父親というものはどの父親でも同じで退屈なものだ」という自明の想定を相手の記憶から呼び起こそうとしていると考えた方が適切ではないかと考える。第三に、*X is A* を伝達したいと思っている話し手が、なぜ *A is A* という形式を使用するのかを説明していない。もし、*X is A* を伝達したいのなら話し手は *X is A* といえよ、または、それを強く伝達したいなら繰り返して言えばよいことである。本稿では、伝えたい内容をそのまま表す表現ではなく、より解釈に労力がかかる *tautology* が使用されるのは何故かを関連性理論の枠組みでうまく説明出来ることを示す。

## 2.5 Fraser の考察

Fraser (1988) によれば、*A is A* という tautology は、命題的内容と発話行為の二種類の意味を伝達するとし、次のように規定している。

- (16) An English nominal tautology signals that the speaker intends that the hearer recognize:
- (i) that the speaker holds some view towards all objects referenced by the NP;
  - (ii) that the speaker believes that the hearer can recognize this particular view;
  - (iii) that this view is relevant to the conversation. (Fraser 1988: 217-218)

すなわち、tautology を使用することによって話し手は、すべての NP に当てはまるある考えを聞き手が認識することを意図しており、話し手の頭の中にある考えに反映されているある NP の属性 (property) は当該文脈に依存し、聞き手の推論によって導出されるというのである。Fraser は、聞き手がどのようなメカニズムで当該文脈から話し手の抱えている考え (命題内容) を復元するのかについては何も説明していないが、Fraser の考えは支持できるものであると考えられる。Fraser は、*A is A* から特定の命題内容や (16) に示される発話行為を聞き手はどのようにして文脈から復元するのかに関して、推論によるということ以外何も述べていないが、関連性理論の ad hoc 概念を用いた本稿の考察では、それらをうまく説明することが出来るのである。

## 3. ad hoc 概念と語彙語用論

本節では、本稿の基本的枠組みとなる関連性理論の ad hoc 概念構築という語用論過程とは何か、また言語的にコード化された意味をもとにした語用論である語彙語用論とは何かを概説する。

関連性理論では、人間の認知は関連性によって動機づけられ、あらゆる意図明示的刺激は関連性の原則に基づいて解釈されるとする (詳細は Sperber & Wilson 1995 参照)。人は推論にたけており、ある文脈のある語から関連性の原則に見合うさまざまな概念を呼び起こすことが可能である。ad hoc 概念とは、発話解釈において聞き手が言語的にコード化された概念を基にその語の百科辞典的知識や文脈想定と相関して語用論的に復元するその場限りの概念のことある。さらにそれを構築するメカニズムである ad hoc 概念構築は、関連性理論における発話解釈の過程で、一義化 (disambiguation)、指示付与 (reference assignment)、拡充 (enrichment) 等とともに表意 (explicature) を決定する語用論的過程のひとつに数えられ、主に語彙的せばめ (lexical narrowing)、語彙的緩め (lexical broadening)、メタファー的拡張 (metaphorical extension) 等の解釈に採用されている (Carston 2002 第 5 章参照)。ad



hoc 概念構築のように、言語的にコード化された意味が文脈の中でどのように修正されるのかを探る語用論は語彙語用論と呼ばれ、関連性理論では次のような主張がなされている (Wilson 2002 参照)。第一に、コード化された概念は、話し手が伝達する意味を推論により解釈するときの出発点に過ぎないということである。第二に、推論的解釈には、言語的にコード化された概念と先行文脈によってアクセス可能な情報に基づいた ad hoc 概念の構築を含む。第三に、ad hoc 概念の構築は、聞き手の関連性の探求によって動機づけられ、関連性の見込みが満足させられたところで終わるということである。

具体例を見てみる。ここでは、聞き手は、ある語彙概念を当該文脈に合うように語用論的に調整し、特定の文脈で関連性の原則に一致する表意を復元している。

(17) Kato (of O. J. Simpson) : He was *upset* but he wasn't *upset*. (Carston 2002:324)

(18) Explicature: Simpson was UPSET \* but he wasn't UPSET \*\*.

(17) の例では、*upset* にコード化された概念だけでは意味的に矛盾する。しかしながら、(18) に示されるように、一つめを「気が動転している」という意味での ad hoc 概念 UPSET \*、二つめを (語彙的に強められた) 「殺人を犯すほどの心境にある」という意味での ad hoc 概念 UPSET \*\* と考えればつじつまが合う。つまり、聞き手は、裁判で検察側の証人 Kato 氏が伝えたかったことは「シンプソンは確かに気が動転していたが、殺人を犯すほど動転していたわけではなかった」と解釈するのである。ここで、(17) の証言に対して (19) のような tautology で切り返すことは可能だろう。

(19) *Upset is upset*.

(19) では、一つめの *upset* はコード化された一般的な *upset* の概念、二つめの *upset* はさらに強められた意味を持つ ad hoc 概念として解釈され「(一般に) 気が動転しているということは、罪を犯す可能性も十分に考えられる心の状態のことだ」ということを伝えていると考えられる (4 節参照)。したがって、ある語彙にコード化された意味が、特定の文脈のもとで調整された ad hoc 概念を伝達するという事実は、tautology 発話の解釈にも当てはまると考えられる。

#### 4. tautology の考察

本節では、ad hoc 概念構築と語彙語用論に基づいて、tautology の解釈過程を明らかにする。また、tautology は、聞き手の知識として存在しながら、当該文脈では活性化されてい



ない明白な事実 (obvious truths) を想起させるもの (reminder) として関連性を持つものであり、tautology 発話から生じるさまざまな効果は、その解釈過程から生じる強い推意、及び弱い推意であることを詳細に考察する<sup>6)</sup>。まず、その解釈過程は、(20) のように示される。

- (20) a. Utterance : *A is A*.  
 b. Explicature : *A is A* \*.  
 c. Higher-level explicature : The speaker intends the hearer to know that *A is A* \*.  
 d. Implicatures : (They depend on the contexts.)

tautology 発話から聞き手は *A is A* \* という表意 (明白な事実) を復元する。ここで、一つめの *A* は総称的に理解される<sup>7)</sup>。たとえば、(9) (10) の *War is war* は、それぞれ「戦争というものは (どんな戦争でも)、罪のない多くの人を犠牲にする残虐な行為だ」「戦争というものは (どんな戦争でも)、儲けになる」と解釈されるだろう。(13) (14) の *A father is a father* は、それぞれ「父親というものは (どんな父親でも)、途中でやめることは出来ない」「父親というものは (どんな父親でも)、物足りなくて退屈だ」と解釈されるだろう。したがって、一つめの *A* はその名詞によって表される全てのものを指していると考えられる。*A* \* は *A* に語彙的にコード化された概念と文脈情報から ad hoc に導出された属性を表す述部 (predicate) と解釈される<sup>8)</sup>。たとえば、自己中心的で飽きっぽく何かにつけ大人になり切れていない人に関して *He is a kid* と言った場合、*a kid* は大人として未成熟で、子供が特徴的に持っている (文脈特定の) 否定的なある属性を表すだろう。tautology の二つめの名詞句も、同様に、特定の文脈の中で決定される属性を表す名詞句であると考えられる。さらに、tautology は全て (20c) に見られるような高次表意 (higher-level explicature) を伝達するかもしれない。つまり、tautology は、聞き手に *A is A* \* で表される自明の想定を聞き手に想起させるものとして関連性を達成すると考えられるからである。その表意と当該文脈から、強い推意、さまざまな弱い推意が復元されることもある。たとえば、*A is A* \* という想定を聞き手が発話時に考慮に入れておらず、話し手が当然それを考慮に入れるべきだと思っているような文脈では、それを責めるような態度的推意が伝達されるだろう。tautology が聞き手への reminder として関連性を持つならば、その想定は少なくとも発話時には聞き手の頭の中にはないので、責めるという態度推意は当然、ある時には強く、ある時には弱く伝達されるかもしれない。さらに、*A is A* \* という想定を、他の集団に属している人は知らないが自分たちが属する特定の集団のみに自明のこととして共有しているという文脈では、話し手が聞き手との微妙な連帯感や共感を伝達することもある。tautology の解釈で、聞き手は、*A* \* という ad hoc 概念を含む表意や、話し手が聞き手に *A is A* \* という自明の想定を記憶から呼

び起こすよう意図していることを示す高次表意、さらにそれらから文脈情報と相関して導出されるさまざまな推意を、全て推論によって導出する。このような推論過程は、他の意図明示的刺激と同様、関連性理論における下記のような解釈手続きに基づいて行われる。

- (21) Relevance-theoretic comprehension procedure:
- a. Follow a path of least effort in computing cognitive effects: Test interpretive hypotheses (disambiguations, reference resolutions, implicatures, etc.) in order of accessibility.
  - b. Stop when your expectations of relevance are satisfied. (Wilson 2002)

*Money is money.* という tautology 発話で、具体的にその解釈過程を考えてみる。

- (22) (Mary finds a penny on the street and picks it up.)  
 Tom : Why did you pick it up? It's just a penny.  
 Mary : *Money is money.*
- (22') a. Explicature : Money is MONEY\*.  
 b. Higher-level explicature : Mary intends Tom to know that money is MONEY\*.  
 c. Implicated premise : We should not undervalue anything that has value.  
 d. Implicated conclusions : Even a penny has value. We should not undervalue a penny.

(22) の文脈で、Tom は、(22'a) の表意、(22'b) の高次表意を復元し、さらに (22'c) のような推意前提と相関して (22'd) のような強い推意を導出すると考えられる。(22) の Mary の発話に見られる二つめの money は、通常その語によってコード化されている money の概念ではなく、「(量の大小に関わらず) 価値のあるもの、大切なもの」という ad hoc 概念 MONEY\* を伝達していると解釈される。また、Mary は「お金というものは大切なものだ」という明白な事実を考慮しなかった Tom に対して「何故そのような当たり前のことを考慮に入れられないのか」と責めたり、あざけるようなさまざまな態度的な推意を伝達しているかもしれない。一方、同じ *Money is money.* という tautology は下記のような文脈でも使用される。

- (23) (Mary won a lot of money in a public lottery. Her friend Jane is envious.)  
 Jane : You are the happiest girl in the world, aren't you?  
 Mary : *Money is money.*
- (23') a. Explicature: Money is MONEY\*\*.  
 b. Higher-level explicature: Mary intends Jane to know that money is MONEY\*\*.

c. Implicated premise: To be able to get a range of things does not necessarily mean happiness.

d. Implicated conclusion: Mary is not necessarily that happy

(23) では、Jane は (23'a) の表意、(23'b) のような高次表意を復元し、さらに (23'c) のような推意前提と共に処理され、(23'd) のような推意結論を導出すると考えられる。(23) の Mary の発話における二つめの money は、それにコード化された意味ではなく、「限られた範囲のものを得るためのもの」という ad hoc 概念 MONEY \*\* を伝達していると解釈される。また、「お金は限られたものを得るためのものであって、何でも手に入るわけではない」という当然のことを考慮に入れていない Jane に対してその浅はかさを責めたり、あざけるようなさまざまな態度的な推意を伝えているかもしれない。このように、*Money is money.* という tautology が異なる文脈の中で使用されると、異なる ad hoc 概念が構築され、よって、さまざまな話し手の意図が伝達されることがわかる。つまり、ある tautology 発話の解釈は、Wierzbicka が主張するようにその形式がコード化している意味を解読することではなく、通常の発話のときと同様、発話のコード化された意味と文脈情報によって、聞き手が話し手によって意図された想定を復元する作業なのである。

ad hoc 概念を取り入れた語彙語用論による tautology の考察にはさまざまな利点がある。第一の利点は、tautology の解釈に関わる語用論的メカニズムを説明することが出来るということである。tautology の解釈に必要な表意、高次表意、推意に関わる推論過程はすべて一様に (21) で示された関連性理論の解釈手続きに基づいて行われるのである。第二に、ある tautology 発話が文脈によってさまざまな情報を伝達するという事実を説明することができる。それは、ひとつのコード化された概念から文脈に応じてさまざまな ad hoc 概念が構築され、また、それぞれの表意は、さらに文脈情報と相関し合ってさまざまな推意群を復元するからである。第三に、なぜ *A is A.* という tautology によって、*X is A.* を伝達できるのかを説明することができる。tautology 発話は、*A is A \** と解釈される既存想定 (明白な事実) の reminder として関連性を持ち、tautology によって伝達される表意 *A is A \** において、最初の *A* は総称的に解釈され、必ず当該文脈で話題になっている *X* を含むからである。第四に、辻本 (1996) で述べられたように、なぜ *X is not A.* の 'not' によって否定されるものには、普通なら否定のスコープに入らないさまざまな要素が入ってくるのかを説明できる。ad hoc 概念はコード化された意味とその語に関するさまざまな百科辞典的知識から構築されるからである。第五に、英語の名詞句 tautology になぜさまざまな統語的な形式が存在するのかを説明できる。それは、Wierzbicka が言うように形式がある特定の意味をコード化しているからではなく、*A is A.* の最初の *A* は特定対象物の指示というより、総称として解釈されることが多いので、(叙述部の属性に応じて) 不定冠詞や複数形の総称表現が使用されるからで

ある。もちろん、*war* 等の抽象名詞には冠詞は付かない。日本語のように冠詞や複数屈折辞を持たない言語では、*A is A* は全て同じ形式を取るが、対応する英語の *tautology* とほぼ同じ意味を伝達するという事実からも、その意味は統語形式から来ると言うより、完全に推論にゆだねられることがわかる。

## 5. おわりに

最後に、1節であげた問いに答えていく形で本稿を結びたい。まず、一つめの「聞き手はどのように *tautology* を解釈するのか」の問いに対しては、第4節で示したとおり、通常の意図明示的伝達の解釈と同様、関連性理論の解釈手続きによって解釈される。*tautology* 発話の表意の復元には、*ad hoc* 概念の構築が重要な役割を果たしている。第二の問い「話し手は *tautology* を使用することによって何を伝達しようとしているのか」に対しては、前節で例証したとおり、*tautology* から復元される表意と、高次表意、さまざまな推意を伝達していると考えられる。第三の問い「*tautology* を使用することによってどのような効果が意図されているのか」に対しては、一見 *A is A* という無意味な文を使用しながらも、その解釈を聞き手の語用論的推論に任せることによって、また明白な事実想定のリマインダーとして関連性を持つという事実によって、字義通りの伝達にはない次のようなさまざまな効果を達成すると考えられる。即ち、文脈情報の共有などからくる微妙な連帯感を感じることが出来る。*ad hoc* 概念の構築にはその語のコード化された概念からその語の百科辞典的知識と当該文脈情報によって、話し手によって意図された概念を呼び出さねばならないので、その概念が複雑であればあるほど、それを伝達した話し手とそれを見事に復元した聞き手との間に敬意に似た連帯感が感じられるだろう。さらに、辻本 (1996: 130) でも述べられている議論をうち切るような語調の強さや、有無を言わさぬ説得力を感じさせる。それは、構築された *ad hoc* 概念を含む表意は、誰にとっても (少なくとも聞き手にとっては) 既存の、明白な事実であるから、議論の余地がなく、結果としてかなり強い印象をもたらすと考えられる。最後に、聞き手が伝達されていることを真に理解したとき、かなりの辛辣さを感じるかもしれない。それは、復元した表意は明白な事実であり、それを見のがしていた聞き手に対する話し手の非難等の態度が伝達されるからであると考えられる。

関連性理論では、従来「ことばの彩」という形で片づけられてきた、*metaphor*、*metonymy*、*irony* も、聞き手の解釈の問題であるという観点から、普通の発話解釈と同じ解釈過程で説明出来ることを示してきた。本稿でも、*tautology* は決して *natural class* ではなく、聞き手の解釈の問題であるとし、通常の関連性理論の解釈過程で説明出来ることを示した。

注

\*本稿は、日本語用論学会第5回大会（2002年12月7日、於：関西外国語大学）において口頭発表した原稿に加筆・修正を加えたものである。指導教官の内田先生をはじめ、貴重なコメントを頂いた査読委員の先生方に心から御礼を申し上げたい。

- 1) Grice は、同様に量の格率違反によって特別会話含意が引き出される例として次の例を挙げている。  
“Dear Sir, Mr. X’s command of English is excellent, and his attendance at tutorials has been regular. Yours, etc.” (Grice 1989: 33)
- 2) NSM については、Wierzbicka (1987: 103) 参照。
- 3) Grice の含意と区別するために、推意という用語を使用する。推意に関しては S&W 1995: 182 参照。
- 4) GCI に関しては、Grice (1989: 37-38) 参照。
- 5) 辻本は、この種の否定には普通なら否定のスコープに入っていないようなさまざまな要素（ある語の発音の仕方、使用域など）が入ってくるとし、Horn (1985) のいう metalinguistic negation に近いものではないかと述べている (1996: 132)。
- 6) Higashimori, I. & D. Wilson は、関連性理論における tautology 解釈に関して、以下のように述べている。“One possibility would be to treat these cases as reminders, implicating that an obvious truth has been overlooked” (1996: 120) .
- 7) A is A. の形式は、下記の例のように、固有名詞を取る形がある。この例では、一つめの A は Lizzy という特定の指示、二つめの A は Lizzy のある属性を示す ad hoc 概念であると考えられる。  
A : She isn’t Lizzy, if you please, she is Her Imperial Majesty.  
B : Lizzy is Lizzy (to me). (辻本 1996: 136)
- 8) 小泉 (1997: 244) でも、tautology は主語の持つ一般的特性のひとつを場面に応じて強調するときを用いる表現方法であると述べているが、文脈特定の特性を推意として扱い、次例のように「子供は（無邪気だ、無邪気なのが）子供だ。」のように解釈されると分析している。

参考文献

- Allwood, J. et al. 1977. *Logic in Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 荒木一雄・安井稔他. 1992. 『現代英文法辞典』東京：三省堂.
- Bulhof, J. and Gimbel, S. 2001. “Deep Tautologies.” *Pragmatics & Cognition* 9:2, 279-291.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances*. Oxford: Blackwell.
- Fraser, B. 1988. ‘Motor Oil is Motor Oil: An Account of English Nominal Tautologies.’ *Journal of Pragmatics* 12, 215-220.
- Grice, P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Higashimori, I. and D. Wilson. 1996. “Questions on Relevance.” *UCL Working Papers in Linguistics* 8, 111-124.
- 小泉保. 1990. 『言外の言語学』東京：三省堂.
- 小泉保. 1997. 『ジョークとレトリックの語用論』東京：大修館書店.
- Levinson, S. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 三木悦三. 1995. 「トートロジーと呼び起こし」, 『英語語法文法研究』2: 19-33.
- 瀬戸賢一. 1988. 『レトリックの知』東京：新曜社.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

- Sperber, D. and D. Wilson. 1998. "The Mapping between the Mental and Public Lexicon." In P. Carruther, & J. Bouchers (eds.) *Language and Thought: Interdisciplinary Themes*, 184-200. Cambridge: Cambridge University Press.
- 辻本智子. 1996. "Tautology in Discourse." 『尾崎寄春・大沼雅彦両教授退官記念論文集』127-136. 同刊行委員会(編). 京都: あぼろん社.
- Ward, G. and J. Hirschberg. 1991. "A Pragmatic Analysis of Tautological Utterances." *Journal of Pragmatics* 15, 507-20.
- Wierzbicka, A. 1987. "Boys will be Boys: 'Radical Semantics' vs. 'Radical Pragmatics'." *Language* 63, 95-114.
- Wilson, D. 2002. "Relevance Theory: From the Basics to the Cutting Edge." Given at International Christian University, Division of Languages, Graduate School Division of Education.